

に當つて、一方に祁を巨夷反と見て *Kilien* と読み、他方に土夷反と見て *silien* と読むことは、前後矛盾し撞着せる語を免れまいが、思ふに一方は先きに引いた註文に見える鮮卑語の關係などから *si* の音を選び、他方は在來の読み習はしとか、師古の用ゐる馴れた所とかいふやうな理由によつて、*si* の音を與へたものであらう。要するに *si* と *s* の兩音の極めて相近きに基いて生ずる轉訛の一現象であつて、前にも引いた賢毒、乾毒、身毒、信度などが、同一國名を寫すのと同じ理由に外ならぬ。さて顔師古はかく二度まで匈奴では天を祁連と謂ふことを註示して居るのであるが、如何なる材料に基いてかゝる説を爲せるか明かでない。師古以前にかゝる解釋を今日に残して居るものはないやうである。しかし當時何等か此の説明の根據になる材料があつたであらうし従つてまた確かな説明であるべきことは、之を他の匈奴語の上に加へられた解釋と考へ合せても、認容すべきことであると思ふ。然らば天を祁連といふのは如何なる國語によりて説明すべきであるか白鳥博士は既に屢此の問題の解釋に従事せられ、初めには之をトルコ語青の義 *Kük* より轉じて天の義となれるものゝ複數形 *Kükler* の音譯と考へ、次には師古の説必しも依據するに足りないといふ立場から、同じトルコ語で雪の義である *Kiran* と考へ、更に滿洲語にて天をいふ *Kulun* と考定せられた。自分は今この上に愚見を加へて、徒に蛇足を添へやうとは思はない、もし自分が祁連を以て純粹の匈奴語と考へ、今日の北方語中にその緣故を求むる方針に出るならば、また此等以外の語を求めるとは出來なかつたらうと思ふ。ただ *-ien* の韻を有する「連」に對して、*Kulun* の *-un* を認めることが果して適當であるかどうかは、尙詮索すべき餘地がありはしないかと思ふのみである。然らば解釋の方針を別にして如何に之を考へるかといへば、自分は之を以て祆と同一の語、言ひ換ふればこれもまた漢語の天の轉音に外ならぬであらうと思ふ。